

## 日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(7): 国語学習方略との比較

北 條 礼 子\*  
(平成11年4月30日受理)

### 要 旨

本研究の目的は、第一に日本人 EFL 学習者(大学生)が母語である国語の学習において用いている学習方略を明らかにすることであり、第二に調査対象者の外国語である英語の学習方略と比較することである。国立大学1年生139名を対象に1998年4月に調査を実施し、その結果、英語の学習方略、国語の学習方略それぞれにつき4因子を抽出した。さらに以上の8因子を比較検討したが、複雑に関連し合っていることが明らかになった。

### KEY WORDS

学習方略 learning strategy      英語教育 English education  
国語教育 Japanese education      語学教育 language education

### 1. 研究の背景

現在、欧米の外国語(英語)学習の分野における学習方略の研究は、その教授可能性を試行する段階を迎えていることが報告されている(Cohen, 1998; Oxford, 1996)。国内でも英語教育における学習方略に関する研究が数多くみられるようになってきたが、これから学習方略の研究はその教授可能性を探る方向へ向うことが予想される。

ところで、母語における学習方略と外国語における学習方略には関連があるのではないかとする指摘がある(Rubin, 1996)。仮に母語における学習方略と外国語における学習方略との間に共通性があるとすれば、その学習方略は学習者にとって未知のものではないので、理解しやすいものとなると考えられる。日本人 EFL 学習者を対象とした学習方略研究が、その教授可能性を探る方向に向うことを想定し、母語での学習方略と外国語(英語)の学習方略がどのように関連しているのかを調査し、共通している部分があるのかどうかを明らかにすることは十分に意味のあるものであると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人 EFL 学習者(大学生)の母語である国語学習における学習方略の調査項目を作成し、その上で彼らがどのような学習方略を用いているのかを明らかにする

---

\* 言語系教育講座

ことである。本研究の第二の目的は、日本人 EFL 学習者 (大学生) の英語の学習方略を明らかにすることである。本研究の第三の目的は、日本人 EFL 学習者 (大学生) の英語の学習方略と国語の学習方略を比較することである。

### 3. 研究の方法

3.1 対象者：国立大学1年生 139名

3.2 測定具：計68項目から成る5段階尺度形式のアンケート

内訳は、①国語の学習方略に関する40項目、

②英語の学習方略に関する28項目

なお、国語の学習方略の調査項目の作成にあたり、本調査に先立ち公立高校2年生132名を対象に実施した自由記述式アンケートの集計結果とすでに作成済みの英語の学習方略28項目を基に40項目を作成した。

3.3 調査実施時期：1998年4月

3.4 手続き：約15分の実施時間で、集団調査を行った。回答形式は「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階で、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析、相関分析

### 4. 研究の結果

#### 4.1 平均値・標準偏差

##### 4.1.1 国語の学習方略

表1：国語の学習方略の平均値と標準偏差(N=139)

項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD
1	3.35	1.17	11	2.94	1.19	21 <sup>△</sup>	4.12	0.93	31	3.45	1.10
2	3.59	1.36	12	3.36	1.27	22 <sup>△</sup>	4.12	1.01	32	3.18	1.21
3	3.78	0.97	13	3.27	1.19	23	3.24	1.27	33 <sup>△</sup>	4.17	0.85
4	3.70	1.00	14	2.71	1.09	24 <sup>△</sup>	4.15	0.95	34 <sup>△</sup>	4.22	0.91
5	3.21	1.21	15	2.06	0.98	25	3.20	1.12	35	3.22	1.10
6	3.09	1.13	16 <sup>△</sup>	4.28	0.72	26	2.50	0.99	36 <sup>△</sup>	4.61	0.63
7	3.58	1.22	17	3.41	1.10	27	3.43	1.08	37	3.42	1.08
8	2.18	0.93	18	3.27	1.18	28	3.37	1.12	38	3.36	1.15
9	3.63	1.12	19 <sup>▽</sup>	1.60	0.94	29 <sup>△</sup>	4.14	0.82	39	4.17	0.79
10	3.06	1.12	20	2.93	1.03	30 <sup>△</sup>	4.13	0.91	40	3.19	1.04

△ 天井効果を示した項目

▽ フロア効果を示した項目

研究の対象者の母語である国語の学習において日本人 EFL 大学生が用いている学習方略に関する40項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目の平均と標準偏差を示したものである。

以上の40項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目16, 21, 22, 24, 29, 30, 33, 34, 36の質問項目を、天井効果が生じたものと判断し、また項目19の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、これらの計10項目は因子分析に持込まなかった。

#### 4.1.2 英語の学習方略

日本人 EFL 大学生が用いている英語の学習方略に関する28項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表2は各項目の平均と標準偏差を示したものである。以上の28項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目4, 27の2つの質問項目を、天井効果が生じたものと判断し、因子分析に持込まなかった。

表2：英語の学習方略の平均値と標準偏差(N=139)

項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD
1	3.60	0.99	8	3.37	1.07	15	3.29	1.19	22	3.73	0.99
2	3.17	1.21	9	3.75	1.11	16	2.83	1.04	23	3.01	1.30
3	3.22	1.24	10	3.27	1.24	17	3.95	1.11	24	3.92	0.95
4 <sup>△</sup>	3.99	1.02	11	3.39	1.11	18	1.90	0.81	25	2.14	0.96
5	3.26	1.11	12	2.15	1.04	19	3.01	1.23	26	3.26	1.11
6	3.96	0.94	13	3.68	1.02	20	3.83	0.97	27 <sup>△</sup>	4.14	0.91
7	2.41	1.12	14	2.29	1.00	21	3.04	1.09	28	3.83	1.07

△ 天井効果を示した項目

## 4.2 因子分析の結果

### 4.2.1 国語の学習方略について

国語学習における学習方略に関する40項目の得点について、天井効果を示した項目16, 21, 22, 24, 29, 30, 33, 34, 36の9項目とフロア効果を示した項目19の1項目、計10項目を削除した後の30項目の得点について、共通性の初期値を SMC とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は78.32%であった。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.45以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表3に示すとおりである。

表 3 : バリマクス回転後の因子負荷量(国語学習方略 : N=139)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目28	0.72687	-0.04659	0.14575	0.00654	0.55180
項目18	0.70820	0.08465	-0.02015	0.01841	0.50945
項目 1	0.56397	0.39293	0.24236	0.13901	0.55052
項目 3	0.41236	0.19401	0.22083	0.13382	0.27435
項目32	0.38833	0.16754	0.30152	0.02335	0.27033
項目13	0.34820	0.31503	0.32331	-0.24675	0.38589
項目12	-0.32760	-0.03230	-0.00214	-0.11528	0.12166
項目26	-0.01126	0.59405	0.09047	0.08422	0.36830
項目 8	0.23041	0.56585	0.03039	0.09569	0.38336
項目11	0.09879	0.56339	0.15847	0.23505	0.40753
項目15	0.26069	0.55552	-0.19050	0.05926	0.41637
項目10	0.32665	0.47274	0.21166	-0.26170	0.44348
項目25	0.06034	0.42412	0.33583	0.00822	0.29637
項目31	0.33720	0.36370	0.16453	0.21005	0.31717
項目 9	-0.12204	0.34368	0.03025	0.20565	0.17622
項目14	0.23820	0.27285	0.17528	0.12933	0.17864
項目40	0.05624	0.32288	0.57237	-0.00530	0.43505
項目39	0.00330	-0.07238	0.57191	-0.08009	0.33875
項目38	0.10722	0.10272	0.54118	-0.02216	0.31541
項目 6	0.23427	0.08002	0.51967	0.15682	0.35593
項目17	0.06518	0.27235	0.45459	-0.18273	0.31846
項目 4	0.14852	0.10508	0.42682	0.26292	0.28441
項目37	0.21887	0.09589	0.40658	0.26501	0.39264
項目27	-0.04737	-0.11817	0.38187	-0.23779	0.21857
項目 5	0.26774	0.23841	0.08108	0.66897	0.58262
項目 7	0.27151	-0.11194	0.11306	0.58798	0.44475
項目23	0.10117	0.18655	-0.10217	0.57718	0.38861
項目20	-0.02406	0.05124	-0.23416	0.57357	0.38702
項目 2 ◆	0.47979	0.02879	0.04791	0.48773	0.47121
項目33	-0.10371	0.27505	0.10679	0.45014	0.30044
説明分散	2.86714	2.77513	2.62731	2.51573	10.78530

(注) 網かけされた数値は0.45以上。

◆ 両義性のみられた項目。

因子 I に対して .45以上の負荷量を示した項目を表 4 にあげた。因子 I には項目 28, 18, 1 の計 3 項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、授業をしっかり聞き、語句の意味調べなど、よく辞書を引き、さらに授業で聞き逃した漢字の読み方、意味、文法があれば授業以外の時間に勉強するという、授業を中心として国語を勉強していることがみて取れる。以上から、因子 I は国語の授業を意識して勉強している姿勢であると考えられたので、「授業意識」と命名した。

表 4 : 因子 I (「授業意識」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
28	0.73	授業をしっかり聞く
18	0.71	語句の意味調べなど、よく辞書を引く
1	0.56	授業で聞き逃した漢字の読み方、意味、文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する

次に因子 II に対して .45以上の負荷量を示した項目を表 5 にあげた。因子 II には項目 26, 8, 11, 15, 10 の計 5 項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、現代国語の勉強時間が十分取れるように計画を立て、効果的な勉強法をみつめようとしながら、教科書の問題を復習するなど、たいいてい授業のための予習、復習をしていることと、自国の文化を学習しようとするところがけていることがわかる。以上の項目に共通しているのは、因子 II は国語の学習のため計画的に学習を行おうとする姿勢であると考えられたので、「学習計画」と命名した。

表 5 : 因子 II (「学習計画」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
26	0.59	教科書の問題を復習する
8	0.57	現国の勉強時間が十分取れるように計画を立てている
11	0.56	現国の勉強が効果的にできるような勉強法をみつめようと心がけている
15	0.56	現国の授業のため、たいいてい予習、復習する
10	0.47	自分の国の文化について学習しようとする心がけている

さらに因子 III に対して .45以上の負荷量を示した項目を表 6 にあげた。因子 III には項目 40, 39, 38, 6, 17 の計 5 項目が含まれていた。これらの項目内容から、因子 III は長文を読みながら、わからない語句に線を引いて意味を調べたり、指示語が何を指しているか考えたり、段落ごとの要旨をつかみ、内容を要約するという学習者の長文読解に関するものであることがわかる。この因子には誰かの発表を聞きながら、内容を予測するという内容の項目も含まれているが、これは読解の際に行われている予測という点が共通していたものと推察される。以上の項目に共通しているのは、因子 II は国語の学習のため計画的に学習を行おうとする姿勢であると考えられたので、「長文読解」と命名した。

表6：因子Ⅲ(「長文読解」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
40	0.57	指示語(あれ, それなど)が何を指しているか考える
39	0.57	長文を読みながら, わからない語句に線を引いて意味を調べる
38	0.54	段落ごとの要旨をつかむ
6	0.52	誰かが発表したり, 話すのを聞いているとき, その人が次に何を言うかを予測することを心がけている
17	0.45	長文の内容を要約する(あらすじをつかむ)

最後に因子Ⅳに対して.45以上の負荷量を示した項目を表7にあげた。因子Ⅳには項目5, 7, 23, 20, 33の計5項目が含まれていた。これらの項目内容をみると, 入試, 受験を念頭において漢字を中心に勉強していることが示されている。この中には受身的ともいえるような学習態度も含まれていた。以上の項目に共通しているのは, 入試を意識しながら漢字を重点的に学ぼうとする傾向であると考えられたので, 因子Ⅳは「入試・漢字重視」と命名した。

表7：因子Ⅳ「入試・漢字重視」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
5	0.69	入試によく出る漢字や熟語を暗記する
7	0.59	漢字は漢字テストを利用しておぼえる
23	0.58	受験のための参考書, 問題集を勉強する
20	0.57	現国は先生の言ったとおりの方法で勉強する
33	0.45	気合いを入れて長文を読む

#### 4.2.2 英語の学習方略について

英語学習における学習方略に関する28項目の得点について, 天井効果を示した項目4と項目27の2項目を削除した後の26項目の得点について, 共通性の初期値をSMCとした反復主因子法を実行し, 後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として, 再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後, 各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は86.03%であった。次に4因子の解釈にあたり, 回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表8に示すとおりである。

因子の解釈にあたり, 基本方針として, 表8の回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

表 8 : 英語の学習方略のバリマクス回転後の因子負荷量(N=139)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目18	0.61632	0.17603	0.10927	-0.14250	0.44308
項目25	0.51358	0.21328	0.17446	-0.18421	0.37362
項目14	0.50315	0.31308	0.03431	0.06579	0.35669
項目7	0.49112	0.08056	0.12863	0.18541	0.29861
項目23	0.48441	-0.07582	-0.15384	0.23281	0.31827
項目19	0.47435	-0.05700	0.08264	0.15543	0.25924
項目21	0.45045	0.01835	0.20559	0.12901	0.26215
項目12	0.41944	0.26325	0.08415	0.17670	0.28353
項目5	0.36686	0.05833	0.25309	0.25823	0.26872
項目8	0.33815	0.22634	0.19374	0.33001	0.31202
項目3	0.24867	0.01140	0.08538	-0.03212	0.07029
項目9	-0.01988	0.77169	0.15247	0.17952	0.65137
項目13	-0.02727	0.76609	0.05023	0.12601	0.60604
項目15	0.08689	0.43189	0.20218	0.05055	0.23751
項目2	0.24860	0.41073	0.17703	0.05258	0.26460
項目10	0.10310	0.25293	0.05818	0.12323	0.09318
項目16	0.09241	0.36784	0.56882	0.00172	0.46741
項目22	0.14631	0.09007	0.55401	0.19224	0.37341
項目26	0.19141	0.22757	0.52434	0.00586	0.36340
項目1	0.17660	0.23197	0.51856	0.02692	0.35463
項目17	-0.02979	-0.01949	0.50115	0.22672	0.30382
項目28	0.15363	0.41206	0.42817	0.00619	0.37676
項目6	0.22605	0.05882	0.40169	0.22955	0.26861
項目24	0.20022	0.21036	0.23698	0.64643	0.55837
項目20	0.19276	0.09964	0.25681	0.63014	0.51011
項目11	-0.04276	0.14123	0.01463	0.46382	0.23712
説明分散	2.62078	2.41276	2.24268	1.63632	8.91254

(注) 網かけされた数値0.45以上。

因子 I に .45以上の負荷量を示した項目を表9にあげた。因子 I には項目18, 25, 14, 7, 23, 19, 21の計7項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、英語で話しかけられる人をさがして、英語を話す機会を作ったり、誰かが英語で話していたらその人が次に何をいうのかを予測しようとしたり、自分の行動や見たものを英語で説明できるかどうか試したり、自分の文化である日本文化を学習しようとする心がかけている学習者の姿が思い浮かぶ。また、英語の本を読む機会をつくって、英語を勉強しようとし、いちいち辞書で単語の意味を調べないようにしていることもこの因子に含まれている。以上から、因子 I は、学習者が英語を話したり読んだりするばかりでなく、自分の文化を学ぼうと心がけるなど、英語に積極的に接触しようとする姿勢を表していると考えられたので、「英語接触努力」と命名した。

表9：因子 I (「英語接触努力」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
18	0.62	英語で話しかけられる人をさがし、英語を話す機会をつくる
25	0.51	英語で書かれた本を読む機会をなるべく多くつくり、英語の勉強に役立てようとする
14	0.50	誰かが英語で話すのを聞いているとき、その人が次に何を言うかを予測することを心がけている
7	0.49	自分がしている行動や自分が見たものについて、英語で説明できるかどうか試してみる
23	0.48	英語の長文を読むときに、意味のわからない単語をいちいち辞書で調べない
19	0.47	単語を聞いたり読んだりするときには、単語一語一語を日本語に訳さないように心がけている
21	0.45	英語で話す人々の文化について学習しようとして心がけている

次に、因子 II に .45以上の負荷量を示した項目を表10にあげた。因子 II には項目 9, 13の計2項目が含まれていた。これらの項目をみると、因子 II は入試に出る単語、熟語、基本の英文(基本構文)を暗記するという内容であることがわかった。以上から、因子 II は入試を重視して学習している姿を表していると考えられたので、「入試重視」と命名した。

表10：因子 II (「入試重視」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
9	0.77	入試に出る単語、熟語を暗記する
13	0.77	入試によく出る基本の英文(基本構文など)を暗記する

さらに因子 III に対して .45以上の負荷量を示した項目を表11にあげた。因子 III には項目16, 22, 26, 1, 17の計5項目が含まれていた。これらの項目の内容は、因子 III は英語の勉強時間を十分に取、効果的な勉強法を心がけ、英語の発音、単語や文法を授業時間以外にも練習し、英語で何か良い結果が出たときには自分をほめるというものであった。以上の項目に共通して



いるのは、英語学習のために計画的に学習しようとする姿勢であると推察されたので、因子IIIは「学習方法」と命名した。

表11：因子III(「学習方法」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
16	0.57	英語の勉強時間が十分取れるように計画を立てている
22	0.55	英語の勉強が効果的にできるような勉強法を見つけようと心がけている
26	0.52	英語の発音が正しくできるように練習する
1	0.52	授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する
17	0.50	英語で話が通じたり、成績が良かったり、つまり英語で何か良い結果が出たとき、自分をほめる

最後に因子IVに対して .45以上の負荷量を示した項目を表12にあげた。因子IVには項目24, 20, 11の計3項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、誰かと英語で話しているとき、適切な単語や表現を思いつかなければ似たようなもので代用し、文法的にも正しいようにと文法を意識するということであり、これら3項目に共通しているのは、何とかコミュニケーションを使用とする態度であると考えられる。そこで因子IVを、「コミュニケーション志向」と命名した。

表12：因子IV「コミュニケーション志向」因子)の負荷の大きい項目とその内容(N=139)

項目	負荷量	項目の内容
24	0.65	誰かと英語で話しているとき、適切な単語を思いつかなければ、似たような意味の単語や語句を使う
20	0.63	誰かと英語で話しているとき、適切な表現を思いつかなければ、似たような意味の別の言い方で代用する
11	0.46	文法的に正しいようにと、できるだけ文法的を意識する

### 4.3 英語学習方略と国語学習方略の関係

#### 4.3.1 平均値・標準偏差

英語の学習方略4因子(ELS1~4)と国語の学習方略4因子(JLS14)間に関連があるのかどうかを調べるため、両者間の相関係数を求めた。その結果は表13に示す相関行列である。

表13をみると、まず英語学習方略の因子I「英語接触努力」は国語学習方略の因子I「授業意識」、因子III「長文読解」と5%レベルで有意な相関を示し、さらに因子IIの「学習計画」と5%レベルで有意な相関を示した。次に英語学習方略の因子II「入試重視」は国語学習方略因子I「授業意識」、因子II「学習計画」、因子IVの「漢字問題集」とそれぞれ1%レベルで有意な相関を示していた。さらに、英語学習方略の因子III「学習方法」は国語学習方略の因子I「授業意識」と1%レベルで有意な相関を示していた。最後に英語学習方略の因子IV「コミュニケーション志向」は国語学習方略の因子II「学習計画」、因子III「長文読解」と1%レベルで有意な

相関を示していた。

表13：英語学習方略と国語学習方略の相関行列(N=139)

ELS2	0.25**						
ELS3	0.12	0.11					
ELS4	0.16	-0.05	0.02				
JLS1	0.29**	0.31**	0.18*	0.11			
JLS2	0.20*	0.35**	-0.09	0.29**	0.33**		
JLS3	0.22**	0.14	0.13	0.21*	0.54**	0.24**	
JLS4	0.13	0.22**	0.10	0.12	0.30**	0.14	0.29**
	ELS1	ELS2	ELS3	ELS4	JLS1	JLS2	JLS3

\* p<.05 \*\* p<.01

## 5. 考 察

### 5.1 日本人学習者（高校生）の国語の学習方略の特徴について

本研究では日本人学習者（大学生）の用いている国語の学習方略として以下の4因子が抽出された。

因子Ⅰ：授業意識

因子Ⅱ：学習計画

因子Ⅲ：長文読解

因子Ⅳ：入試・漢字重視

第Ⅰ因子の「授業意識」に含まれている項目内容は、学校での授業を中心に据え、授業を意識して国語の勉強をしているというものであった。

次に、第Ⅱ因子の「学習計画」の表す内容は、国語の勉強時間の計画を立てたり、効果的な勉強方法を心がけたり、日本文化を学習しようとする心掛けなどのメタ認知方略の内容である。またこの第Ⅱ因子には教科書の問題を復習する、授業の予習、復習をするなど、予習、復習中心の学習も含まれている。以上のに共通しているのは、国語の学習にあたってどのように学習するかを表す内容であると考えられる。

さらに第Ⅲ因子の「長文読解」であるが、この因子に含まれる項目内容から、学習者にとって外国語である英語学習と違い、母語である国語学習において長文読解学習が重要な位置を占めていることと、その長文読解過程では、ボトムアップとトップダウンの両方のアプローチが行われていることが推察される。

最後に第Ⅳ因子の「入試・漢字重視」の表す内容は、ここから、本研究の対象者が大学に入学したばかりの1年生であることも大きく関係していると推測されるが、いまだに入試のための勉強が頭にあることや、国語学習において、漢字の学習というボトムアップ的アプローチが行われていることが明らかになったといえよう。

## 5.2 日本人学習者（高校生）の英語の学習方略の特徴について

本研究では日本人学習者（大学生）の用いている英語の学習方略として以下の4因子が抽出された。

因子Ⅰ：英語接触努力

因子Ⅱ：入試重視

因子Ⅲ：学習方法

因子Ⅳ：コミュニケーション志向

第Ⅰ因子の「英語接触努力」は大学生が英語を話そうとしたり読もうとしたりするばかりではなく、自国の文化を学ぼうと心がけるなど、英語に直接触れて英語を学習しようとするメタ認知方略であり、学習者の積極的な努力を表していると考えられる。日本人は、国際的に口下手であるとの評価を受けることが多いようであるが、本研究の対象となった大学生は、英語に対して積極的であるようである。

次に、第Ⅱ因子の「入試重視」の表す内容は、基本的で入試に関係すると思われる英文、単語を暗記するという、ボトムアップ的な記憶方略を中心とした認知方略が含まれている。本研究の対象者はすでに入試を通過した大学生であるが、4月に入学したばかりの状態であり、まだ入試が意識内に残っている状態であると推測される。

さらに、第Ⅲ因子の「学習方法」であるが、この因子は、自分の学習状態をチェックするというメタ認知方略をはじめとし、英語の発音の練習などの認知方略や自分をほめるという社会的／情意的方略が含まれていた。

最後に、第Ⅳ因子の「コミュニケーション志向」は、英語を話しているとき、単語や表現が思いつかないとき、別の単語や表現で代用するという認知方略の内容である。これは何とかコミュニケーションをしようとする学習者の意欲を表すものと考えられるが、日本人大学生を対象としている先行研究(Watanabe, 1991)や、筆者が日本人高校生対象として行った調査(北條, 1999)をにおいても抽出された因子である。この因子は海外の先行研究では報告されていない因子である。日本人学年の場合、大学生、高校生と年齢層が異なっても、このコミュニケーションに積極的に取り組もうとする姿勢が共通してみられたことから、これは日本人学習者に特徴的な傾向であると推測される。現在教育現場では英語のコミュニケーション能力の育成が目標の1つとなっているが、ALTを活用した教育現場でのこの態度の育成に向けての努力が少なからず反映されているのかもしれない。

## 5.3 日本人学習者（高校生）の英語の学習方略と国語の学習方略の比較について

日本人学習者（高校生）が用いているの英語学習方略と国語の学習方略を比較すると、図1のようになる。

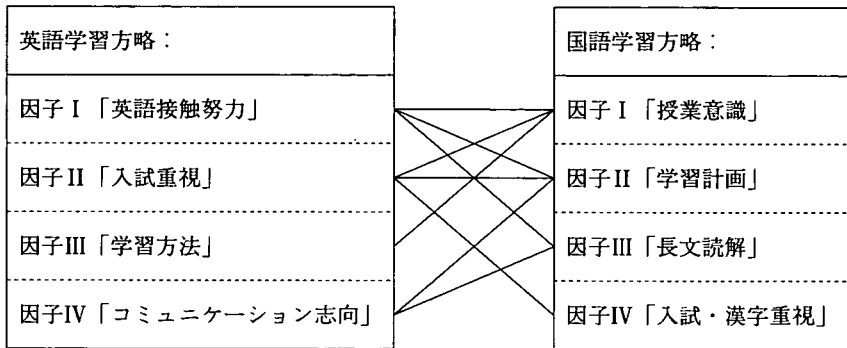


図 1：日本人 EFL 大学生の英語学習方略と国語学習方略の関係 (N=139)

図 1 をみると、まず英語の学習方略因子 I 「英語接触努力」が国語の学習方略因子 I 「授業意識」、因子 III 「長文読解」の両者と 1% レベルで、また因子 II 「学習計画」と 5% レベルで有意に相関していた。ここから、英語学習、国語学習のどちらにおいても積極的に取り組もうとする姿勢が共通していると考えられる。

次に、英語の学習方略因子 II の「入試重視」は国語の学習方略因子のうち因子 I 「授業意識」、因子 II 「学習計画」、因子 IV 「入試・漢字重視」の 3 因子と 1% レベルで有意な相関を示した。この理由として、対象者は入試を重視している高校を卒業したばかりであり、まだ入試のことが強く意識に残っているのではないかと考えられる。

さらに英語の学習方略因子 III の「学習方法」は国語の学習方略因子 I の「授業意識」と 5% レベルで有意に相関していた。これらの 2 因子をみると、授業で聞き逃した単語や文法は、授業時間以外で勉強するという項目内容が共通していた。このことから学生は、英語ばかりでなく、国語を勉強するときにも、授業の内容を意識していることが推察される。

最後に英語の学習方略因子 IV の「コミュニケーション志向」は国語の学習方略因子 II の「学習計画」と 1% レベルで、因子 III の「長文読解」と 5% レベルで有意な相関を示した。ここにおいても、細かい内容が共通しているというより、言語学習に対する積極性という点で共通性がみられるものと推測できよう。

以上から、英語の学習方略と国語の学習方略には、ある程度の共通性があり、それは言語学習に対する積極的姿勢、授業重視、受験・授業重視といった点であると考えられる。また、本研究では、対象者の母語である国語学習においては、長文読解が重要な因子であり、そこではボトムアップとトップダウンの両方のアプローチが取られていた。一方、外国語としての英語学習においては、長文に関する因子は抽出されず、ここから長文読解におけるトップダウンのアプローチが行われていないことが容易に推測できると考えられる。この傾向は、著者(1999)の日本人高校生を対象とした研究でも見られ、少なくとも日本人 EFL 高校生、大学生に特徴的であると思われる。

[本研究は平成 9・10 年度科学研究補助金基盤研究 C 「日本人学習者の言語 (国語・英語) 学習における学習方略のモデル構築に関する研究」の成果の一部であり、1998 年日本教育工学会第 13 回全国大会において発表した「言語 (国語) 学習において日本人学習者が用いる学習方

略に関する研究」(同大会講演論文集361-362頁)の一部である。]

### 参 考 文 献

- Cohen, A.D.1998. *Strategies in Learning and Using a Second Language*. Longman.
- Ellis, R. 1996. *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.) Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 北條 礼子. 1998. 「言語(国語)学習において日本人学習者が用いる学習方略に関する研究」1998年日本教育工学会第13回全国大会講演論文集 361-362.
- \_\_\_\_\_. 1999. 「日本人学習者の言語(国語・英語)学習における学習方略のモデル構築に関する研究」平成9・10年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書。
- Oxford, R. L.(Ed.) 1996. *Language Learning Strategies around the World: Cross-Cultural Perspectives*. University of Hawaii at Manoa.
- Rubin, J. 1996. Using Multimedia for Learner Strategy Instruction. In Oxford, R.L. *Language Learning Strategies around the World: Cross-Cultural Perspectives* (151-156).
- Shigeno, J. 1998. A Study on Awareness of Corrective Feedback with Japanese EFL Learners' Errors in Oral Communication Activities. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.
- Watanabe, Y. 1991. Classification of Language Learning Strategies. *International Christian University Language Research Bulletin*, 6, 75-102.

## A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (7)

Reiko HOJO

### ABSTRACT

It has been reported that learning strategies of learners' first language could be transferred to those in EFL learning environment. However, almost no research has been done on the relationship between these two kinds of learning strategies. Moreover, in order to investigate it, it is crucial to develop the questionnaire items for Japanese learning strategies.

The main purpose of this study is to investigate learning strategies of Japanese language, after preparing appropriate questionnaire items. The second purpose of the study is to clarify the subcategories of English learning strategies used by Japanese EFL university students. The third purpose of this study is to compare English learning strategies with Japanese ones used by Japanese learners.

Firstly, data on the factors mentioned above were gathered from one hundred and thirty-nine university freshmen in March of 1998, using a questionnaire consisting of sixty-eight items as a total. Secondly, the data were analyzed by factor analysis, extracting 4 factors for each learning strategies respectively. Thirdly, correlational coefficients were computed between 4 factors of English learning strategies and 4 of Japanese learning strategies, revealing that these eight factors were correlated in a complex way.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages